

もみの木ニュースレター



子どもたちと「もみの木」ステーション

3.11 祈りの集い



←「もみの木」には、シンボルとして東北地方の地図と希望の虹色ろうそく、復活ろうそく、追悼を表すカップろうそく・ゆりの花を飾った。参加者が書いた「祈りのカード」を籠にあつめた。



この日、「もみの木」には、仮設住宅に住む方を中心にスタッフを合わせて80名が集まった。

あの日何が起こったかをもう一度心にしるしここに帰るために。谷大二サポートセンター長は、一年前の3.11以後を振り返って、サポートセンターで取り組んできた支援について話し、これからも福島の方々と連帯して「もみの木」を拠点として活動を継続することを参加者に伝えた。2時46分に黙祷。もみの木が手狭で身動きがとれず、追悼ろうそくの点火は、後になってしまった。

原発事故で避難してきている方々が多いこの地域は、復興という言葉の中で出口の見えないトンネルの中を歩いている方が多い。祈りのカードに『広野に戻りたい』『家族と一緒に暮らしたい』『原発の収束』と書かれていた。



同じ3月11日午前10時は、被災県茨城・日立教会でもミサ・祈りが捧げられた。日立教会の信徒からは、「もみの木」スタッフに激励の手紙とケーキが届いた。

学習支援が、3月10日からスタートした。

近隣の大学生たちが、小学生達に交替で取り組んでいる。→



←さいたまからアップライトピアノが寄贈された。これからみんなの元気な歌声が響くことでしょう。



現地で傾聴を続けている地元のグループ『みみ』はピンク色のベスト『もみの木』ステーションは緑色のベスト毎週、打ち合わせをする二つのグループ。

「もみの木」を拠点としてのこれから

震災から一年、いわき市には、仮設住宅や民間借上げ住宅が約3000戸あり多数の方が避難されている。そのうちまだごく一部しか「支援の輪」ができていないのも現状。今後の課題は、「何ができるだろうか?」と自ら問いかけをしながら二年目の歩みを踏み出そうとする。



いわき市国道六号線を北上すると四ツ倉港へ積みあがったままの船が